

コロナ患者の訪問診療医 マスクなし診察でも信頼得る行動力

2022/5/23 上阪 欣史 日経ビジネス副編集長

兵庫県宝塚市で保健所からの委託を受けノーマスクで新型コロナウイルス感染患者の訪問診療を続ける医師がいる。それいゆ会こだま病院の児玉慎一郎理事長だ。訪問時には感染防護服も着用していない。マスクなしでも患者から信頼され、保健所からの訪問診療の要請はひきもきらなかった。なぜ、ノーマスクで治療にあたるのか。ワクチンも接種しない「けったいな医者」のコロナ禍での活動を追った。

「ようやく落ち着いてきたなあ」。今春、児玉医師によりやく余裕が生まれるようになった。

児玉医師は2021年4月から22年5月初めまでの間、1～95歳のコロナ患者約500人を訪問診療。感染者数が急増した21年の「第5波」、22年の「第6波」で市内の病院が病床ひっ迫を起こす中、自宅にとどまらざるを得ない患者宅を東奔西走し、治療に心血を注いだ。診察中、亡くなった陽性反応の高齢患者は1人だけいるが、老衰だったため死因は判然としない。いずれにしてもほぼ全員を救った腕利きの医師だ。

ノーマスクになったのは第5波の途中からだ。マスクを取ったのにはれっきとした理由がある。それは後から説明するとして、なぜ、児玉医師は訪問診療に駆けずり回ようになったのか。



こだま病院では医師18人、看護師・パート71人が勤務する地域の医療機関だ

「発症後すぐの処置が肝心」

20年の秋ごろ、こだま病院では主に中等症以上のコロナ患者を受け入れるため、4床の専

用病床を確保、入院者の治療にあたるようになった。病院では建物の構造やスタッフの問題から、人工呼吸器やエクモ（ECMO=体外式膜型人工肺）は使えない。このため、入院患者が重症化した場合は基幹病院へ搬送する体制を敷いていた。

転機は21年の4月、感染拡大の「第4波」の最中に訪れた。診察した外来患者のコロナ陽性が判明。基礎疾患があったことから受診の時から呼吸が荒く、酸素飽和度も中等症レベルに悪化していた。

だが、コロナ病床は満床。受け入れ先も見つからず自宅待機となったが、重症化リスクはなお大きい。

そこで児玉医師は意を決する。「こうなったら僕が患者宅で診察するしかない」。



児玉医師は時間を問わず宝塚市内を東奔西走した

児玉氏の行動は早かった。酸素濃縮器を取り扱う会社に連絡し患者宅に運んでもらった。酸素マスクや鼻に直接酸素を送り込むチューブ状の「経鼻酸素カニューレ」も用意し、酸素を供給。肺炎など症状の悪化を食い止めた。

感染症法の分類上、2類相当の新型コロナは保健所がコントロールする規定になっており、一連の内容を市内の保健所に報告した。すると、その後、保健所から電話がきた。

「ほかの何人かのコロナ患者にも訪問診療をやってもらえないか」。市内の病床はなかなか空きがなく、訪問診療しか手が残されていない。しかも、児玉医師のように訪問診療してくれる医師会の医師はいなかったというのだ。

「やるしかない」。保健所から各患者の生年月日や症状経過を聞き、点滴や消炎鎮痛剤などを抱えて、患者宅に急行した。中には息も絶え絶えに苦しもうめき声をあげる若い女性もいた。酸素供給や点滴などの処置を施し、患者を一人ひとり治療していった。

5月に入り保健所からの訪問診療の依頼はすべて引き受けるようになった。平日の通常

診療のかたわら、早朝や夜間に自宅を訪れ診察。土曜、日曜日がつぶれることも多々あった。

児玉医師は「コロナは時間との戦い。できるだけ発症の早い段階で治療を始めることが肝心」と話す。こだわるのは、自己免疫力を発揮してウイルスに対抗できるような患者の体を持っていく治療法だ。

通説よりも独自の理論貫く

内科医の間では「発熱しても解熱剤は無理に使わない方がいい」との意見があるが、児玉医師の持論は「熱で体力が奪われたら免疫力が低下する。それが落ちないようにするのが最優先事項」。また、感染症医の間では「解熱剤を使うと症状が和らぎ重症化しているか判別できない」との見識が一般的だが、「重症化のサインは肺炎を併発したかどうか。呼吸の状態を観察すればそれは分かる」と児玉医師は話す。呼吸状態がかなり悪い場合は「ためらわずステロイドを使う」と言い、多くの命を救ってきた。

診察依頼が殺到

当時、宝塚市内で訪問治療に精を出したのは児玉医師だけ。コロナが指定感染症である以上、ほとんどの開業医や地域の医療機関では、法律的に発熱外来を拒否できるとあって処置にあたる医師は少なかった。

「医者である以上、職業意識や使命感を持って、もっと行動を起こすべきではなかったのか」。多くの医院が発熱外来を受け付けなかったことに、児玉医師は今も憤まんやるかたない気持ちを吐露する。

21年夏、第5波の到来とともに7月下旬には2~3日で30人ほどの診察依頼が保健所から殺到した。それでも児玉医師はすべて受け止めた。「いつでも何人でも診ます!」「治療を遅らせたくないの、患者記録をつくったらすぐに電話を!」と保健所に呼びかけた。患者には自分の電話番号も教えていたため昼夜問わずあちらこちらから電話が鳴った。

第5波では第4波に比べ、比較にならないほどの自宅待機者が増えたが、第5波で感じ取ったのは「患者が回復していくスピードが速くなっている」ことだった。「変異ウイルスは弱毒化していて、重症化もしにくくなっている」。現場にいる自分でしか分からないコロナのリアルな実態。それが分かってくると「コロナは極度に恐れなくていい」とマスクを外すようになった。

児玉医師がクラスターの発生源になったことは一度もないという

また、コロナは「エアロゾル」というウイルスを含んだ空気中に漂う微粒子を吸い込んで感染するという科学的エビデンス（論拠）が数多くあった。児玉医師は「空気を通した感染ならマスクをつけていても無意味」と判断した。

欧米ではエアロゾル感染が幅広く認知されている。遅ればせながら日本でも「コロナの主な感染経路」という見解が、国立感染症研究所から3月に公表された。室内では空気の入替えこそ最大の感染防止対策といわれている。マスクなしには「これだけ多くの患者と接していれば免疫力も十分あるだろう」という妙な自信もあった。

感染症対策用の防護服など“重装備”もやめた。そうした格好が「逆に家族や近隣住民を恐怖に陥れ、『コロナは脅威』との誤解を生む。本末転倒になる」と感じたからだ。

ノーマスク姿で訪れた児玉医師に患者や家族は当初、面食らう。だが、家族は濃厚接触者で無症状でも感染しているリスクは高い。ノーマスクの理由を説明すると、患者や家族

の大半は分かってくれた。重症化のバロメーターである呼吸濃度を正確に測定するため、患者にもマスクを外してもらった。

「マスクしろ」。SNS で非難も

児玉医師はワクチンも「百害あって一利なし」と接種していない。基礎疾患もなく無症状・軽症が大半のウイルスに「打つ必要を感じない。効果も疑問しかない」とあつけらかんとしている。

「おかしいだろ」「マスクしろ!」。SNS 上ではいわれのない非難を浴びせられることも多々あった。だが、児玉氏の考えは揺るがなかった。

実際、500 人を超える陽性患者を診ながらマスクなし、ワクチン接種なしでも児玉医師は一度も感染した自覚はない。児玉医師を感染源としたクラスター発生も一度もないという。厳密に言えば、感染しても無症状状態だったかもしれないが、「コロナ禍で体の大きな異変は何も起きていない」という。

保健所も訪問診療に孤軍奮闘してくれる児玉医師に、マスクだのワクチンだのと何も注文をつけることはなかった。一方、児玉医師はこの2年を振り返り、保健所の健闘をたたえる。「職員のみなさんは毎日、患者の電話対応から記録の作成、病院とのやり取りまでものすごい労力で仕事をこなしていた」という。

そんな保健所の実情を知った宝塚市内の有志の看護師らが応援に駆け付けたことも。保健所職員や児玉医師らと一緒に治療にあたった。

本連載の「マスクや自粛はいつまで 出口戦略なきコロナ対策で傷む日本経済」「コロナ対策、行動制限に疑問符 ワクチン接種も異論相次ぐ」で見てきたように、コロナ感染による重症化・死亡率は極めて低くなっており、世界各国は終息に向けて動いている。

児玉医師はこう訴える。「日本もそろそろ19年以前の日常に戻るべきだ。マスクは体調が悪い人だけ付ければいいし、ワクチンも努力義務を撤廃し不安な人だけ打てばいい。コロナ禍で失ったものをこれから取り戻していかなければならない」

マスクもしない、ワクチンも打たない型破りな医師だが、メディアで尊大に感染対策を言うだけの専門家や発熱外来を拒んだ医師たちとは違う。誰よりも現場で患者と向かい合い、多くの命を救ってきた行動派の言葉には重みがある。